

織華長屋

影の狐は不敵に笑う

おいがつお

織華長屋。それは、一見するとごくごく普通の長屋であつた。

何も知らぬ者が織華長屋の近くを通りかかっても、特に目を引くこともなく、そのまま横を通り過ぎていくだろう。

あるいは、ぐうぜん時と場合がよかつたならば、長屋の前に翡翠の着物を着た少女の姿が見えるかもしれない。その少女、翠姫は、織華長屋の大家さんだ。

年相応のかわいらしさと、長屋の住民たちを束ねる器量を備えた彼女は、織華長屋の名物とも言える人物である。

実際、外に出ていた翠姫と目があえば、

「こんにちは！」

と、ふわりと明るい灯火のような笑顔と共に、気持ちの良い言葉をかけてくれるにちがいない。

平和な光景だ。

しかし。だまされてはならない。

織華長屋が何の変哲もない長屋だと思つるのは、大きな過ちだ。

知る人は知っている。ここが悪の妖怪たちの巣窟であ

ることを。

街のどこにでもある町民たちの住まい、長屋。この織華長屋も、一見すると、ごく普通の長屋にしか見えない。

しかし、織華長屋に住む住民たちは、恐るべき正体の持ち主であり、恐るべき力の持ち主であり、恐るべき思想の持ち主であり……………

これは、正義の侍と悪の妖怪たちの間でくり広げられた、古き時代の壮絶な大戦を描いた物語である――

弥谷はごくふつうの団子屋であつた。

自分の暮らす長屋の前に屋台をかまえ、道行く人に団子を売る。それが彼の日常である。

朝。丸々とした白い団子が、弥谷の前に並ぶ。

一本のクシに刺す団子の数は、決まって四つ。

すう、と小気味よく次々にクシへ通っていく団子。ちようどよいやわらかさだ。

「うっし」

団子を刺したクシは、火床ひどしのそばに突き立てられていく。

パタパタパタ……

うちわであおがれ、チロチロとゆらぐ炎。

香ばしい匂い。

文字通り毎日味わっていても、あきない香りだ。

風で飛んでいく団子の香りといっしょに、弥谷の商売は始まる。

「団子おー、団子おー」

朝も早いとさすがに客足は伸び悩むが、朝食では足りなかった食いしんぼうが、仕事の行きがけにフラリと立ち寄ることもある。

彼の店で一番売れ行きが良好なのは、クルミあんの団子である。

ほどよくつぶしてある、炒ったクルミの食感と香ばしさ、舌からむホカホカとしたまろやかなあんが、団子とよく合うと評判なのだ。

先ほど売れたのも、このクルミあんの団子。うれしいことに、こいつをよく買ってくれる常連さんが何人もいる。

そして今日、常連さんのうちが一人は、お昼過ぎにやってきた。

「いつ来ても良い匂いがするな、ここは」

そんな言葉と共にぴよこりと現れたのは、翡翠の着物の似合う少女。

「おっ。翠姫ちゃん」

いらっしやい、となじみのお客に弥谷があいさつ。

そう。我らが織華長屋の大家さん、翠姫も、よく団子を求めて訪れるのである。

「今、新しいのをあぶってるところでさ」

「ほほう」

火床に刺したばかりの、真つ白な団子が翠姫をさそう。

「何にするんだい？」

「そうだな……」

少しまゆを動かす翠姫。

「クルミあんとみたらしを一つずつくれ」

「はいよ。ちよいと待ってくんな」

うちわを動かしながら、弥谷は言った。

「それにしても、今日はヨクバリさんだな。二本も食べちまおうなんて。涼霜さんに怒られちゃうぜ」

「ちがうちがう」

翠姫は手を横にふる。

「一本は菜子の分だ」

涼霜も菜子も、翠姫と同じ織華長屋の住民である。

「この後、ちよいと二人で話す予定があるからな。その時のおやつだ」

「そういうことかい」

パタ、とうちわを止めた弥谷。

「話って、アレかい？」

うちわを口元の右あたりに持つていった弥谷は、ないしょ話をするように、翠姫にたずねた。

「座天丸さんとの決闘のことかい？」

「……まあな」

ニヤリ、と笑う翠姫。

「明後日にヤツとの決闘がひかえているのだ」

ヤツ、と翠姫が口にしたのは、カンナギサムライの異名を持つ男、座天丸のことである。

数多くの妖怪を祓ってきた正義の味方、それが座天丸という存在だ。

そんな彼と、翠姫や長屋の住民がなぜ決闘を行うのか。理由はかんたんだ。

翠姫——いや、彼女をふくむ織華長屋の者どもが、みな妖怪だからである。

織華長屋に住む者たちに、人間はだれ一人としていない。

ありふれた長屋の一つとして建つ織華長屋は、妖怪たちの隠れ蓑。その実態は、人間たちに恐怖をふりまく悪の組織〈織華〉の根城なのだ。

今、団子をながめている少女にしか見えぬ彼女——翠姫も、ひとたび本性をあらわにすれば、狐の耳としつばが生える。

織華長屋の大家、もとい、悪の組織〈織華〉大首領たる翠姫は、狐の妖怪天狐であった。

「今度こそ。座天丸を打ち倒してやるのだ……！」

織華にとつて座天丸とは、何度も刃を交えてきた、いわば宿敵。

すでに果たし状は送っている。

次こそはにつつきヤツを討つ！ と、翠姫は息巻いていた。

「そうかい、そうかい」

ククク、と狐の牙が光る翠姫に対し、弥谷はうなずいた。

「しかしねえ。この前も、そのまた前も、座天丸を倒してやる——って言ってなかったかい？」

「う……」

団子屋の言葉につまる翠姫。

「また今回も、座天丸さんにやられちゃうんじゃないかい？」

「やめんか」

からかうような弥谷に、翠姫はほおをふくらませて抗議した。

「こんなかわいい娘が、決闘なんておつかないマネするもんじゃないさ」

「なにおう。我は悪の大首領だぞ」

実のところ、織華長屋の真の正体を知る者は、少ない

ながらも町に存在する。

弥谷もその一人であった。

恐るべきことに、織華の名はじわじわと浸透しているのだ。

「まったく。そんなこと言うヤツの団子なんて買ってやらんからな」

「そりゃ怖い。さっきの発言は取り消す、カンベンしてくれ」

この通り、弥谷は翠姫におそれおののき、大首領のお言葉にただ従うほかない。

「わかればよいのだ」

翠姫は大きくうなずいた。

時に、寛大な心をもって矮小な人間を許すことも、悪を広めるには大切なことである。

「さて、そろそろいい塩梅だ」

気がつけば、火床の団子はチリチリとうまそうな焦げ目をつけていた。

そこへぬりたくるのが、弥谷の店がほこるクルミあん。

食い入るように見つめる翠姫の小腹が、匂いにつられてきゅるりと鳴った。

おそらく本人にしか聞こえていないだろう。そうであつてほしいと彼女は思った。

続けてもう一本にも、みたらしがツヤツヤとぬりたくられていく。

「おまたせ、翠姫ちゃん」

「おお……！」

二本の団子を受け取り、ご満悦の翠姫。

団子のタレよりもキラキラと目を輝かせる彼女は、どうにも悪の大首領とは言いがたい。

そんなことを弥谷は考えたが、また怒られそうなので口に出すのはやめておいた。

「いつもありがとうな、弥谷」

「こつちこそ、喜んでくれるんなら何よりで」

自分の作つたものをうまいと言ってくれるなら、団子屋冥利に尽きる。

「決闘、がんばっておくれよ」

「ああ！」

ふんふんと鼻歌を歌いながら去っていく少女は、織華が大首領にして、恐怖の大妖怪天狐であった。

暮れ六つ（日没）を知らせる鐘も鳴って久しく、夕飯の片づけも終えたころ。

弥谷の部屋で、行灯の光がチラチラとゆれていた。木で作られた下の台の部分に、一匹の狐が彫られているのが特徴的な行灯だ。

この行灯、彼がつい最近新しく買ったものである。狐

の意匠がなかなか気に入る、おまけに値段も安いときていたのが購入の決め手だ。

さっそく狐行灯を使ってみることにした弥谷は、行灯の内部にある受け皿の上に灯明皿を乗せ、火を灯した。ぽう、と小さな光。

ちよいと目がさえていたので、眠くなるまで草双紙（本のこと）でも読もうかと、彼は本屋で借りていた『赤ヶ浜物語』を開いた。本屋の店主である森兵衛にすすめられて読み始めた小説だが、けっこうおもしろいのだ。

一日の終わりに草双紙を楽しむとは、なんとも心がおだやかになるひと時だ。

あくせくはたらいた昼間とはまったく別の空気が、部屋に流れる。

やがて、その空気に引つ張られるように、草双紙を読む弥谷のまぶたが少しずつ重くなってきた。

そろそろ寝るか。

そう思つて布団に入ろうとした、その時。ぽっ。

薄く部屋を照らすだけに過ぎなかった行灯の光が、不意に明るくなった。

おや、と弥谷が行灯の方に顔を向ける。

四角い木の枠に和紙を張り、その内側に受け皿を置くようになっていて、ごくごく一般的な行灯だ。

しかし。今、行灯の紙の後ろに何かが映っている。

手だ。手の影だ。

その手は、手遊びで狐の影を作っているのだ。

目をこする弥谷。

自分の手の影じゃないよな？

両の手のひらを見つめる弥谷。指はピンと張ってある。もう一度、狐の影に目を向ける。

こん、こん。

狐が鳴くような動作を見せた手の影は、すっと消えてしまった。

そして行灯の光も、元の薄暗さへと戻る。

「……？」

すでに、何事もなかったかのように、たたずむ行灯。寝ぼけているのかしら。

行灯に近づいてみても、特別おかしいところもない。

「うーん……？」

首をひねったが、疑問よりも眠気が勝った。

気のせいかな？ もう横になろう。

明日も早いし。

そうして、弥谷の一日は幕を閉じた。

だが。これは始まりに過ぎなかった。

次の日の夜。

「ふいふ……」

満足げなため息をもらしながら、弥谷は部屋の戸を開けた。

今日の団子の売れ行きは絶好調。朝からどんどんクシに団子を刺していき、火加減を調節し、客の対応をしてと、目を回すほどのいそがしさ。

おかげさまで完売御礼。もちろん、ふところもぬくぬくだ。

こういう日には、奮発していい酒を飲むに限る。

そんなわけで、ふだん手を出さないような酒と、ちよつとしたごちそうを味わってきた弥谷は、上機嫌で帰ってきたのである。

ここまで稼げたのは久しぶりだ。大変だったと言えるが大変だった、それでうまいものが食えるならば大満足というもの。

明日もがんばろう、という気にもなる。

気持ちよく眠れそうだ。

弥谷は枕屏風（寝具を隠しておく屏風）をどかし、布団と枕を敷く。

そのままゴロリと床につこうとしたのだが。

ひよう

視界がゆれる。

「んあ？」

顔を赤くした弥谷は、すつとんきような声を上げた。きよろきよろとあたりを見回すと、行灯の光がついている。

はて。俺、火を灯したつけ。

それとも飲みすぎかな。

行灯をじつと見ていると、

こん、こん。

と、何かの影が行灯の障子に映った。

手遊びで作った狐だ。

こん、こん。

狐が虚空に向かって鳴くように、手が動く。

こん、こん。

少し愛嬌があるかもしれない。

「……ははは」

酔っぱらっていたのか、なんとなくそんな気分だったのか。

影の狐に返すように、弥谷は右手で狐を作り、
こん、こん。

と、手遊びの狐の口を動かした。
すると。

ぴたり、と行灯のゆらめきが不自然に止まった。
同時に、中の左手の狐の動きも止まる。

「おや」

とつぶやく弥谷。

しばしの静寂の後。

ぐるり

狐がこちらを向くように、影の手首が動いた。

「え」

左手で作った狐に、射すくめられたような感覚。

寒気。

火照っていた体の熱が、一気に引いた。

影の指がぐわりとうごめく。狐が口を大きく裂けて、
ケタケタと笑うように。

こん、こん、こん。

狐が鳴いた。

まるで、獲物を見つけて得意げに吠える、猟犬めいた

鳴き声。

こん、こん、こん。

見つけた、見つけた、と喜ぶような、そんな鳴き声。
「ひえ……」

のどから絞り出すような音が、弥谷の口からはかれる。
そして。

行灯の光は消え、あたりを包む暗闇。

酒で赤くなっていた顔は反転、悪寒の青に染まってい
る。

もう、心地よく眠る気分ではなかった。

けつきよく、夜中にそれ以上何も起こることはなく、
やがて朝日が昇ってきた。

とはいえ、すっかり寝不足だ。正直、仕事をする気にも
ならない。

目の下にクマをこさえた弥谷は、自分の屋台の前でぼ
んやりと立っていた。

昨日のあの狐。何者なのだろうか。

このまま放っておくと、確実に良くないことが起こる。
本能がそう訴えている。

しかし、だからといって何をすればよいのだろう。
これが恐怖か。

「おはようございまあす」

文字通り眠れぬほど頭を悩ませている弥谷に対して、
やけにのんきな声が聞こえてきた。

「……ん、ああ」

目をこすり、振り返ると、そこには一人の青年。

刀を提げており、人なつっこい笑顔を浮かべている。

「座天丸さんか、おはよう」

彼——座天丸も団子屋の常連だ。

「今日は早いね。いつもならまだ寝てる時間じゃないのかい」

座天丸は食えることと寝ることが大好きな侍だ。弥谷の言う通り、朝は遅くまでぐうたらしているのが彼である。

「いやあ、めずらしく目が覚めてしまいました。せっかくなので、朝の散歩です」

ついでに、と座天丸が人差し指を立てる。

「おいしいものでも食べようかと」

おそらく、後者が真の目的だ。朝の散歩など、座天丸にもっとも似つかわしくない言葉の一つである。

「と思ったんですが、屋台、まだ開いてないですかね？」

座天丸は食いしんぼうだ。ここに来れば、団子を三つ四つは買っていく。

エサを待つ子犬のような瞳で、準備の整っていない屋台をながめる座天丸。

「ああ、いや。ちよつと待っておくれ」

「わあい」

空腹に支配されていた座天丸はむじやきに喜んでいたが、

「……？」

どうも、団子をクシに刺していく店主の様子がおかしい。

「……弥谷さん、なんだか顔が暗いです。何かあったんですか？」

心配そうに彼はたずねた。

「まあ……ちよいと昨日は眠れなくて……」
あまり思い出したいくないできごと。

意識をすると、そのへんの影から狐の化け物でも出てくるのではないかという気さえてくる。

そんなの、一介の団子屋ではどうにもならない。

ふと視線を落とすと、一振りの刀が目に入った。
目の前の客が腰に差した刀である。

「……あ」

弥谷が声を上げた。

そうだ、この人。

「座天丸さん」

「はい？」

「あんた、そういうえは妖怪退治の専門家だったよな？」

団子を口いっぱいにはおぼり、口元についたタレを幸せそうにぬぐっている姿ばかり見ているので忘れていたが、座天丸は正義の味方であった。

「何度も妖怪たちと戦ったことがあるって聞いたし」

「ええ、まあ」

きよとん、とした顔で答える座天丸。

「今夜も菜子さんと決闘する予定ですし」

菜子は悪の組織（織華）が戦闘員の一体だ。

「じゃあ、頼む！ 化け狐ってなんとかできないか、座天丸さん！」

せつばつまった弥谷への返事の代わりに、ぐう

と座天丸は腹を鳴らした。

「うわあ……」

弥谷の部屋に案内され、彼の示す行灯を見た座天丸は、開口一番しぶい声を上げた。

「こりゃあ狐に憑かれていますねえ、この行灯」

しかめ面をする座天丸。

「……なんとか、ならないか？」

危険な化け物なのだろうか。

いくら妖怪退治をしたことがある座天丸と云えど、対処はきびしいのだろうか。

よくない方にばかり考えてしまい、不安になる弥谷。だったのだが、

「なりますよ」

座天丸の返答があまりにもあつさりとしていたので、拍子抜けしてしまった。

「ほ……本当かい？」

「ええ、任せてください」

この食いしんぼう侍をここまでの美味しいと感じたのは、初めてであった。

「ああ、でも、一つお聞きしたいんですが」

「なんだい？」

「行灯、こわしちゃってもいいです？」

「かまわない、かまわない。狐をやっつけてくれるならそれでいい！」

「わかりました。じゃあ、ちよつと出かけましょうか」

よいしょ、と座天丸は行灯を持ち上げた。

「ど、どこに行くんだい？」

「ここで妖怪と戦ったら、いろいろとさわぎになっちゃうし。ぼくが刀を抜いても大丈夫な場所に行きましょう」

こうして、座天丸はてつこ歩き出した。弥谷が後を追う。

「町の外に出てもいいんですが……それよりもあつちの

方が近いもんなあ」

などつぶやきながら、座天丸たちが訪れたのは。

「……で、うちに来たわけか」

長屋の共同井戸の近くで洗濯をしていた翠姫が、木戸（長屋の玄関）をくぐってやってきた二人の話を聞いて、そう言った。

ここは織華長屋。悪の組織（織華）の根城である。

たしかに、ここなら座天丸が化け物と戦いをくりひろげても、何の問題もない。

なにせ、住民がみな妖怪なのだ。化け物が一体出現したところで、彼らは特に驚くこともない。

「とつぜんすみません、翠姫さん。ちょっと、ここで戦っても大丈夫ですか？」

「事情が事情だしな。我はかまわんぞ」

「ありがとうございます」

このやり取りをしている二人は、正義の味方と悪の大首領である。

「空き部屋があるから、好きに使っていいぞ」

「わかりました」

何度も遊びに来ているので、どこが空き部屋かはわかる。

行灯といっしょに、部屋に向かう座天丸。

「……翠姫ちゃん。その、場所を貸してもらってありがたいとうな」

正義の味方のおかげで、いくぶん心の調子もどつてきた弥谷の顔色は、朝と比べるとずいぶん良くなっていた。

「よいよい。いつもうまい団子をもらっているからな」
ワハハ、と笑う翠姫。

織華長屋にいるときの翠姫は、天狐の姿をかくしていない。つまり、今の彼女には、狐の耳としっぽが生えている。

「……そういえば、翠姫ちゃんも狐だったな」

「んあ？ ああ、そうだぞ」

恐怖の大妖怪、天狐であることを証明するかのごとく、彼女は耳をびこびこ動かし、ついでにフサフサのしっぽもゆらす。

お世辞にも怖いと表現するには、少々愛らしさが勝りすぎている。

同じ狐でも、こんなちがうものなんだなあ……。
なんとなしに翠姫の狐耳をながめていた弥谷だったが、

ぎゃいん！

つんざくような獣の悲鳴がひびき、我に返った。

悲鳴が聞こえたのは、ちょうど座天丸が入っていた、織華長屋の空き部屋。

「……な、なにが起きたんだ」

弥谷が動揺していると、部屋の戸がからりと開いた。
「終わりましたよ」

出てきたのは、団子屋の常連にして正義の味方、カンナギサムライ座天丸。

彼が空き部屋に入ってから、かけそばを一杯食べる時間を経過していない。

「もう安心ですよ、弥谷さん。ぼくがアイツをやっつけたので」

「そ……そうか……。ありがとう、座天丸さん」

「いえいえ」

弥谷に手をふった座天丸は、大家の翠姫に向き直る。

「翠姫さん、ごめんなさい。残念ながら、話を通じるような相手ではなくて……」

「うむ、まあ、邪悪な妖気しか感じなかったからな。しかたあるまい」
うなずく翠姫。

妖怪同士、退治されたことに何か思うところがあるのかもしれない。

「ともかく」

座天丸が仕切りなおすように、二人を見やる。

「これにて一件落着、ですね。終わったからおながすきました」

「俺がごちそうする。座天丸さん、好きなだけ食べてくれ」

「いいんですか！」

「恩人にえんりよなんてさせられねえや」

弥谷の言葉に、座天丸はよろこびの舞いをおどる。
やったやったと両手を挙げる彼は、日夜悪と戦う正義の味方であった。

「それにしても、化け狐を退治してくれなんて言われたときはびつくりしましたよ」
思う存分おどった後、そうつぶやく座天丸。

「弥谷さんが化け狐なんて物言いをするものですから、いったいどれほど恐ろしいヤツが出たのかと思いました」
が」

弥谷が翠姫と少し話している時間で、座天丸は行灯の狐を一瞬で片づけていた。彼にとっては、あのていどの相手は朝飯前だったのだろう。

「さすがだな、座天丸」

バシ、と翠姫が彼の背中をたたく。

「ははは。ふだん、もっととんでもない狐が率いる妖怪と戦っていますから」

「またまたあ」

恐怖の狐が消え、ほっと一息ついていた弥谷は、安心して二人のやりとりを聞いていたのだが。

「……ん？」

ちよっとひっかかる言葉があった。

『とんでもない狐が率いる妖怪』

もしかして……。

「座天丸さん」

「なんです？」

「さっき言っていた、とんでもない狐つてのは、ひよつとして」

言葉と共に、視線を下げる弥谷。

そこにいるのは、翡翠の着物を着た少女、

「ああ、翠姫さんですよ」

これまたさらりと言つてのけた座天丸。

当の翠姫が弥谷を見つめる。

背丈も顔だちも、いたってふつうのかわいい娘。ちが

うのは、狐の耳としっぽがあることくらい。

「翠姫ちゃんって……そんなにすごい妖怪なの？」

なじみの団子屋の問いに、翠姫はニヤリと笑った。

「……知りたいか？」

狐の牙が見える。

まっすぐできれいな瞳が、正面から弥谷を見すえる。

彼は翠姫から目がはなせなくなっていたが、気がつく

と鳥肌が立っていた。

「……やめておくよ」

翠姫は大事なお客。妖怪だろうがなんだろうが、自分
にとってはそれでいいのだ。

「翠姫ちゃん。今度うちに来たときは、おまけしてあげるよ」

「やった！ 場所を貸しただけなのに忍びないな」

うれしそうにしっぽをふる翠姫は、いつもの彼女そのものだ。

「おっと、そうだ。座天丸」

「なんでしょう、翠姫さん」

「今夜の決闘は忘れていないな？」

「もちろんです」

「覚悟しておいてくれ」

「はい」

悪の大妖怪に答えながらも、これから何を食べようか、
座天丸はそれをひたすら考えていた。

その日の夜。カンナギサムライ座天丸と悪の組織（織
華）の決闘は、座天丸の勝利に終わった。

これは、正義の侍と悪の妖怪たちの間でくり広げられ
た、古き時代の壮絶な、そう、壮絶な大戦を描いた物語
である――